ISSN 0387-1681

大津絵

四十周年記念号

第50号 2018・1

名著復刊

大津絵こう話

片桐修三 編著

定価3000円+税

巻頭カラーグラビアに代表的な大津絵を37点、巻末に「文献を基とした大津絵略年譜」を収録。

柳宗悦に師事し、大津絵研究の第一人者として知られた著者が晩年まで執筆に取り組み、大津絵の歴史を体系的にまとめた書。

鬼の念仏

中川法夫 著

定価1500円+税

平安・江戸・明治、そして現代の琵琶湖畔に生きる男女の愛の形。江戸時代の近江追分を舞台に、大津絵と豊臣残党狩りを題材にとった表題作「鬼の念仏」（滋賀県文学祭芸術文化祭賞受賞）をふくむ、小説4篇を収録。

再考 ふなずしの歴史

橋本道範 編著

定価2700円+税

日本最古のすしと称されてきた滋賀県のふなずしの製造法の歴史的変遷と現状を、歴史学、文化人類学、生物学、栄養科学などの研究者が集い、さまざまな角度から究明した論考集。

淡海文庫56

戦時下の滋賀師範 —昭和18年の卒業生—

滋賀県平和祈念館 編

定価1200円+税

戦時下の学生生活やクラブ活動、学校教練の様子などとともに、特別攻撃隊の飛行兵を志願して戦死した7名の卒業生の人物像を、彼らの手紙や家族・友人の回想談によって紹介、時代の流れに巻き込まれていった青年たちの軌跡を追う。

サンライズ出版

〒522-0004 彦根市鳥居本町655-1 TEL.0749-22-0627 FAX.0749-23-7720
ホームページ http://www.sunrise-pub.co.jp

大津絵第50号

発行日 二〇一八（平成三十）年一月三十日

発行者 日本大津絵文化協会
会長 山下 正昭
●協会本部および事務局
〒五二〇—〇〇二三
大津市茶が崎—六—二—五〇九
加藤 二三男 方
電話&FAX ○七七—五一五—四四九七

編集者 加藤二三男・山下正昭

印刷 サンライズ出版株式会社
代表者 岩根 順子
彦根市鳥居本町六五五—一
電話 ○七四九—二二—○六二七

明治時代にフランスに渡った大津絵

フランス国立極東学院教授
びわ湖大津ＰＲ大師　クリストフ・マルケ

十九世紀後半の万国博覧会などを通して、いわゆる「ジャポニスム」（日本趣味）という現象が起こり、浮世絵を初め多くの日本美術品や工芸品がフランスに輸入され、ブルジョア階級を中心に日本文化に対する関心が一気に高まった。二〇一六年に大津絵について国際シンポジウムを企画し、そして今年の十二月に『美術フォーラム21』という雑誌の特集「プリミティーブ絵画？　―近現代を生きた大津絵」を編集したことがきっかけで、民衆的な絵画である大津絵については、ジャポニスムの時代に、フランスでどの程度認識されていたのか、また大津絵がフランスにいつ頃から渡ったのかを調べてみた。

管見の限り、フランスの文献上に、「Otsou-yé」という横文字が初めて登場したのは、有名な作家のエドモン・ド・ゴンクール（一八二二―一八九六）の名著『北斎伝―十八世紀の日本美術』（一八九六年）[1]ではないかと思う。この著書は、一八七八年の万博の際に渡仏し、後にパリで日本古美術店を構えた林忠正（一八五三―一九〇六）の協力で編集された葛飾北斎の伝記だが、当時のフランス人のコレクターたちが所蔵していた北斎の作品の紹介も兼ねている。この中で、一八〇〇年（寛政十二年）の北斎の戯画的な摺物の揃物が、「京都の近郊大津で制作されている、フランスのエピナル版画に相当する産業的で大衆的な絵」と比較されたことは興味深い。エピナル版画とは、十八世紀末に生まれた、東フランスのヴォージュ地方の特産品で、木版と型紙でカラフルに彩られ、量産された素朴な版画のことで、行商人によって全国的に販売されたものであり、まさに大津絵に相当している。このゴンクールの指摘は、実際にどの北斎の作品を指しているかは残念ながら不明である。しかし、彼と交流した有名な美術評論家、浮世絵コレクターであるテオドール・デュレ（一八三八―一九二七）が所有していた摺物帖の中に、それに相当すると思われる北斎の小品がある（図1）。大津絵の《座頭》を描いた、寛政から文化頃の北斎の戯画的な狂歌摺物である。一八九七年に売立てられたゴンクール東洋美術コレクションには、大津絵は含まれていなかったようだが、大津絵についてのある程度の知識を持っていたことがこの引用から伺える。

図1　画狂人北斎（画）、万道亭烏兎丸、寛々亭長房、万亀江戸住（狂歌）摺物帖『華乃光　地』（長島雅秀　文化２年記）より、寛政４～文化２年（1792-1805）頃、テオドール・デュレ旧蔵、フランス国立図書館蔵

一八九〇年代にゴンクールを初め多くのフランス人のコレクターに浮世絵などを提供した画商の林忠正が、大津絵も取り扱っていたことを裏付ける作品を見つけた。現在、ロンドンの大英博物館に所蔵されている大津絵《為朝》である（図2）。右下に「林忠正」という小さな蔵書印が捺されている。同博物館の記録によると、一九二九年に約

図2　大津絵《為朝》林忠正旧蔵、大英博物館蔵
©Trustees of the British Museum

図3　《長刀弁慶》《鷹匠》《鬼の念仏》各61.5×23cm。1904年にパリで売立てたピエール・バルブトー所蔵の大津絵

一〇〇点の肉筆浮世絵、浮世絵版画と共に、Murakami Kから購入されたようだが、もともとは林忠正が十九世紀末にパリで売り捌いた作品であろう。

それから、十九世紀末にフランスに大津絵をもたらしたもう一人の人物がいる。浮世絵コレクターの第一人者であるフランス人のピエール・バルブトー（苗字の漢字表記は「馬留武黨」）（一八六二―一九一六）である。バルブトーは、明治十九年から二十九年の間に二回にわたって通算七年間に日本に滞在し、膨大な浮世絵コレクションを蒐集しながら、その歴史を熱心に研究した。また梶田半古、久保田桃水、河鍋暁翠などの日本画家にフランスの寓話の挿絵を依頼し、東京で出版したことでも知られている。一九〇四年にパリの公営競売所ホテル・ドゥルオで売り立てられた彼の日本絵画・浮世絵コレクションの中には、二枚継ぎの古大津絵三点《長刀弁慶》《鷹匠》《鬼の念仏》（図3）が含まれていたことは特筆すべきである。バルブトーは、コレクション目録の解説[2]に、これらの作品は、元禄時代に京都で仏画を描いた後、大津に移って、享保まで大津絵師として活躍したと言われている又平久吉、通称、大津又平の作品であると紹介している。また、又平と岩佐又兵衛が混同されている誤解について説明している。江戸時代には、大津又平を大津絵の創始者とする俗説が伝わり、バルブトーはそれをそのまま受け入れたようである。この三点の大津絵は当時、それぞれ六十二フランで落札された。購入者は、ポール・ベルレーヌの弟子で、スイス出身の象徴主義の詩人シャルル・ヴィニエ（一八六三―一九三四）である。ヴィニエはまさに売り立てと同年の一九〇四年にパリで画廊を開いて、アフリカの原始美術や初期浮世絵などに注目するとともに、東洋美術の鑑定に携わったユニークな人物である。

バルブトーとフェノロサの関係については、まだ解明されていないが、フェノロサの没後の一九一二年に刊行された力作『Epochs of Chinese & Japanese Art』（邦訳『東亜美術史綱』）[3]の中で、バルブトー旧蔵の《長刀弁慶》《鷹匠》《鬼の念仏》の図版が転用されていたことに最近気づいた。ちなみに、フェノロサはこの本の中で、大津絵は、「同一の粗草なる描写を幾枚も作り、廉価を以て此の新派の絵を庶民の間に売弘む目的」で制作されたものだという説明をしている。このように、欧州で出版された、最初の本格的な日本美術概説書である『東亜美術史綱』で、大津絵に触れて、図版を示すことができたのはバルブトーのおかげだといえよう。また、一九二三年にパリで出版されたV.-F. ヴェベールの『古事宝典』[4]という日本・中国図像事典の「大津絵／Ô-tsu-yé」、「弁慶／Ben-

図4　〈槍持奴〉〈鬼の念仏〉〈藤娘〉〈鷹匠〉多色摺木版画、ピエール・バルブトー『日本浮世絵師』1914年より

kei」の項目にも、バルブトーの同じ《鬼の念仏》《鷹匠》《長刀弁慶》が図版として使われている。『Epochs of Chinese & Japanese Art』を見た柳宗悦は、バルブトーの旧蔵品について「挿絵三枚が入れてあるのは注目すべきで、弁慶、鷹匠、鬼の念仏の三図。右のうち鷹匠のみ恐らく初期の作、他のものは中期のもの」と評価した[5]。

バルブトー旧蔵の《長刀弁慶》は、一九六二年に民芸品を取り扱っていたパリのオスティエ日本美術店の民芸展[6]に出品され、のちにアメリカ人のコレクターエドソン・スペンサー夫妻の手に渡り、ミネアポリス美術館に寄贈された[7]。このようにして、バルブトーが明治時代に日本から持ち帰った《長刀弁慶》はフランス、そしてアメリカへと人の手から手に、現在にまで大切に伝わっているのである。その他の二点《鷹匠》《鬼の念仏》についてはフランスのどこかにコレクションに眠っている可能性が高い。そのうちに再び出てくることを期待したい。

バルブトーの話に戻るが、一九一四年の著書『日本浮世絵師』[8]の中でも、大津又平に触れており、旅人に護符として販売されていた大津絵十種のそれぞれのご利益について詳細な説明を加えている。この本の中に、その代表的な画題《槍持奴》《鬼の念仏》《藤娘》《鷹匠》をバルブトーが、自分の漢字名の「石馬」という落款を付して、多色摺りの木版画で複製している（図4）。ちなみに、この本は、大正十五年に大津市で開催された初めての本格的な大津絵展に参考書として展示された[9]。このようにして、十九世紀末に、欧米のジャポニスムの潮流の中で高く評価された浮世絵ほどではないにしろ、大津絵は一部のフランス人の日本美術愛好家から愛蔵され、日本の民画として広く紹介されたのである。

1　Edmond de Goncourt, Hokousaï. L'art japonais au XVIIIe siécle, Paris, 1896, p.24.

2　Biographies des artistes japonais dont les oeuvres figurent dans la collection Pierre Barboutau, Tome 1er, Peintures, Paris, 1904, p.60. バルブトーについては、高山晶『ピエール・バルブトー　知られざるオリエンタリスト』慶應義塾大学出版会、２００８年を参照。

3　Ernest Fenollosa, Epochs of Chinese & Japanese Art. An outline history of East Asiatic design, Vol. 2, 1912, p. 185, "Exemple of Otsu-yé".

4　Victor-Frédéric Weber, Ko-ji Hô-ten. Dictionnaire à l'usage des amateurs et collectionneurs d'objets d'art japonais et chinois, Paris, 1923, vol. 1, p. 54, vol. 2, p. 155-156.

5　『柳宗悦選集』第十巻「大津絵」春秋社、１９５５年、２４１頁。

6　Art populaire japonais. 17e-19e siécle. Ôtsu-e, Paris, Galerie Janette Ostier, 1962.

7　Matthew Welch, Ôtsu-e. Japanese Folk Paintings from the Harriet and Edson Spencer Collection, The Minneapolis Institute of Art, 1994, p. 46-47.

8　Pierre Barboutau, Les peintres populaires du Japon, premier fascicule, Paris, 1914, p. 6.

9　「佛國刊行バルブト一冊　東京　落合直成　所蔵」『大正十五年四月　大津絵展覧会第一部出品目録』滋賀県商品陳列所内大津絵展覧。